

白金葎

9月号



平成 28 年 9 月発行

第 67 号

白金葭定例句会案内

十月二十一日（金）ア 12:00 ~ 15:00 第5兼題…栗、行秋

十一月十八日（金）ア同右、第3兼題…神無月、沢庵漬

十二月十六日（金）ア同右、第五兼題…枯野、炬燵

兼題句参考句（一〇月二一日分 栗、行秋）

天体のかるい爆発みなし栗

志高きは老いず栗熟るる

栗食むや若く哀しき背を曲げて

食ひ入りて出づるを忘る栗の蟲

焙烙に艶栗はぜて山の晴

栗青し一本足に立つ木々よ

ゆく秋のこれが吾とや水鏡

ペンキ屋の行く秋を塗る作業小屋

行く秋の川に映りて歩く父（遠山陽子）

行く秋の橋のたもとの精米所

行く秋の見知らぬ喪服同士かな

行く秋をすつくと鹿の立ちにけり

山中葛子

関森勝夫

石田波郷

小檜山繁子

荒川幸恵

横山白虹

加茂達彌

松原藤吉

飯名陽子

冲睦美

内田庵茂

正岡子規俳

窓評論纂

*「謂ひ應せて何か有」は先師曰として去来が聞いて肝に銘ずる事有とした。この芭蕉の言葉の解釈を自分流にしている方がおられるようなので、もう一度私見をここに述べて終わりにしたい。此れは漢文調で書かれているもので、正確には「謂ひ應せて何余情之有^{なんの か れあら}焉」を訓読して、謂ひ應せて何の余情か之有らんという

ところを、省略して「謂^い應^{おほ}せて何か有^{らん}」と短く書いたのだと思います。去来が路上にてとわざわざざざざざざざのためだろ。何かは英語の what ではなく、why なのです。どうして余情があると言えようか、余情はありはしないという反語として使う漢文の慣用語なのです。余情という主語も省略、之も省略、「何か有」と書いたものである。何かの「か」も書かなくてもよかったのに、書いたのは話し言葉に引つ張られたのだと思う。ここは余情之を文脈から補って解釈すべきところです。何かがあるというものではありません。ある人は、何かを何かとすればわかりやすいとわれましたが、それは漢文ではなく現代の口語的発想であって意味をなしません。漢詩や漢文の中にこういう用法は沢山あります。江戸時代ま

では知識人は漢文を自由に使っていました。紫式部なんか女性だけでも漢文の知識が豊富で父親がこの子は男に生まれればよかったのにと残念がられたと本人が書いております。能書きは、さておき、芭蕉の弟子の支考に左のような俳詩がある。

賛^ス秋風ノ像^ニ 蓮二房

世ニ伝^フ此ノ老翁 越路^ニ恨^ニムト秋ノ風^ヲ

今見^{レバ}何ナニカ難面^{ツレナキ} 松ニ残^スニ夕日ノ紅^ヲ

秋風の像^{かたち}に賛^す

世に伝ふ此老翁 越路に秋の風を恨むと

今見れば何ナニカ難面^{つれなき} 松に夕日の紅を残す

と読むのでしょうか。「あかく」と日はつれなくもあきの風（芭蕉）の小松への途中吟の反駁詩であろう。

ここもどうして日は難面^{つれなき}と申せましようか、松に夕日が紅く照り残しているではありませんか、という反語として使われている。文脈から主語の日を補って解釈するのです。冒頭の言葉は、何がある、何もありません、と読むではありません。教師でもない私がここに長々書いた心をどうかお察し下さり心平らかにお願いします。

*九月十一日の朝日俳壇のうたをよむの項は、松浦寿輝氏の俳文が掲載された。「木枯らしや東京の日のありどころ 芥川龍之介」の句が思春期以来の氏の愛唱句であ

るとか。【京ならば俳句に詠んでさまになるのに「京にても京なつかしやほとゝぎす 芭蕉など」、「東京」という地名に今日なお俳味が乏しいのは、からっ風の吹きすさぶ関東平野の一隅のこのだった広い町の、文化の根の浅さゆえだろう。東京人は、かつての江戸っ子のような誇りも威勢の良さも持ちえないまま、この埃っぽい近代都市の、うそうそとした存在感の薄さをひっそりと耐えている。淡い冬の陽射しを浴びながら、日の「ありどころ」はどこかと訝りつつ、やるせない心許なさを持って余している。そんな心許なさに、間然するところのない表現を与えてみせたのが、芥川龍之介のこの句である。句想の出所はもちろん蕪村の名吟、「風い^かのぼり^きのふの空の有りどころ」であろう。風が泳ぐ高空を茫然と見上げつつ、「きのふ」に思いを馳せ、この不思議な郷愁は何かと問うている蕪村の詩どころはすばらしい。それを讃嘆しながらも芥川は、はたして近代人にこの心の豊かさを持てるのかと気弱に自問し、いや自分は結局、木枯らしに吹きまくられながら、曇空から落ちてくるこの薄い冬日の中で生きてゆくほかないと諦め、開き直っている。】と蕪村の郷愁にまで敷衍し、さらに【東京っ子のわたしは、地方出身の友人たちが背負っている風土の厚みを羨ましく思うたびに、芥川のこの句を心に蘇らせ、自分の生まれたる宿命を噛み締めてきたものだ。】と結ばれている。私のような地方から出てきたものにとつて東京っ子の心境を披歴されるのはありがたいことです。しかしながら、現代は地方の風土の厚みは痩せ細って孝三さんが記念号で書かれたように、蕪村の故郷喪失感を抱

いている地方出の人が多いと思います。どうしても田舎者というコンプレックスが宿ります。芭蕉とて同じではなかったか。明治時代の鷗外にそれを感じます。私の友人が「東京砂漠」だよと云ったことや太宰治の「東京八景」など、この句に通じる心があると思います。

お便り広場（到着順、敬称略）

処暑にしてふみの日のお便りありがとうございます。ございました。美しい絵、私の庭にも同じく二匹を越えた同じものが咲き台風九号にも堪えてくれました。牧野富太郎の日本植物図鑑によると間違ひなく「はなたで」たで科としてあります。毎年こぼれ種子で沢山発芽するので、場所の良い所を何本か残しています。何もせずとも楽しませてくれています。「梅の花」失礼してごめんなさい。十月に光成様のお帰りを待つて又小山さんがお声をかけて下さるそうです。季節の変わりめ御身おいとい下さいます。

（8月26日長屋璃子）

白金蔭八月号頂きました。先日合同句集の最終頁に私の事を多大にのせて頂いていることを発見、本当にその心づかいに感謝してをります。また沢山の資料を頂きましたが、小生には荷が重すぎて失礼させて頂きました。家に誓子の本がありました。次回お会いする機会には持参致します。法隆寺良き旅になること願っています。益々の御活躍を。

（8.31小山陽也）

御葉書頂きました。10月七日は欠席させて頂き。光成さんが法隆寺を見学して我孫子の例会が終わって後また梅の花で十人以内で如何でしょうか。そして法隆寺の話を又して下さい。そして俳句の話を伺わせて下さい。なんとか元気でいます。益々の御活躍を祈ります。

（9.2小山陽也）

冠省「白金蔭」八月号ありがとうございます。貴重な御誌にたくさん書いていただき、ありがたく厚く御礼申し上げます。芭蕉と莊子興味深く拝読いたしました。高円寺（馬橋）も今日は本祭で太鼓の音が聞こえています。 忽々

（9.4 佐藤恵子）

前略取り急ぎ要件のみ申し上げます。計画している法隆寺参拝の件、長井ミサ子さんに連絡して都合を聞きました。まだ日にちがあるのでまだ考えていませんが早いうちに高志に直接電話にて連絡しますとのことでした。

（後略）

（9.4 健二）

入間基地のあたりの航空機が低空で秋空をかきまわしております。白金蔭九月号はどのようなになっているのでしょうか。春夏秋冬の様子がたのしみな表紙であります。最近急に気付きましたが、近くに露草を見なくなりました。あの青が黄色い雑草の多い中にとってもさわやかでしたのに、今年のはかまきりもあり見かけずとかげの姿も見ずどうしたことでしょうか。後期高齢者は生きの

び申し訳なく句作りのヒラメキも衰え困ったものです。

(9.5 長屋璃子)

びっくりしました。お加減はいかがですか。まづは、回復に専念しましょう。小生の友人や身近にも同病者が何人もいます。見るところ最初の手当はもとよりですが、本人自身の発病の受け止めと初めの処し方(振舞い)がその後の回復を左右しています。貴兄の場合、倒れたのではありません。幸い直ぐ病院で手当てできました。だから軽い筈、でも油断は禁物、何よりも本人の心掛け次第。具合がよくなると気が逸るでしょうが、ここは我慢して下さい。九月の例会は見送りましょう。先は長い。そして、以後のやり方を考えましょう。小生いつでも参上します。今迄は皆貴兄に負ぶさり過ぎていました。私事ですが、小生も術後食物の通過障害で思いかげず、入院が通常の三倍も長くなりました。気が揉めました、が、ままよ、と腰を据えました。結果的にはそれが良かった様です。病気は違いますが、同じことだと思えます。どうか回復に専念して下さい。小生の周辺には貴兄と同病で倒れ其の後以前と同様に仕事に励んでいる方がいっぱいいます。短気は損気急がば廻れ。この際一服入れるとの御先祖の仰せと心得られ、先長に楽しみましょう。敏子さんにも余りご心配をかけませんように、小生等も貴兄に倒れられたら俳句が出来なくなります。九月は見

送りました。どうかくれぐれもお大事に。取り急ぎお見舞い方々お願いまで。草々

光成高志兄

(9.7 飯田孝三)

(大変)ご丁寧なお手紙ありがとうございます。孝三さん・みちさんの意見に従い生活を変えました。勝手な思いですが、白金殿に集われた人々は皆天の神様に守られているように思っています。休め!と私の先祖の仰せとは恐縮に存じます。ほんとにそうだなと思いつたりします。50歳の長期入院の時もそう感じたことを思い出しました。私の心筋梗塞病患者は現代大変多いと医者から告げられました。NHKでも21日に放映するらしいです。高志

高志さんのこと驚きました。ご心配でしょうが、手当てが早かったのだし、ご回復は日柄の問題と 생각합니다。ご自身呉々も御身おいと下さいますように。

光成敏子様

(9.7 飯田孝三)

今月分の会費同封致しました。古代は別便です。十月の法隆寺を期待しています。柿の季節ですね。益々の御活躍を祈ります。学生時代日本建築史は法隆寺だけでした。昔はよかった?ですね。みちさんを大切にして下さい。

(9.9 小山陽也)

今日御葉書を頂いてビックリしました。合同句集二三頁読んだだけで光成さんは大変だったと思ひました。完全に過労です。とにかく十二分に休養を取って下さい。古代は適当にお子様達にあげて下さい。法隆寺もまたの

機会にしましょう。とにかくゆっくり静養して下さい。外出できるやうになれば私の方から我孫子まで出かけます。みちさんも大いに手抜きをして疲れることのないやうに願います。

(9.9 小山陽也)

前略 お葉書拝見してびっくりしました。連日の酷暑に加えて過日の記念誌の編集やら何やかにやとお忙しい毎日が重なっての事と思います。この際ゆっくりと静養して早く元気になって下さい。句会の取り止めは大変残念ですが十月を楽しみにしております。みち様も何かとご苦労と思いますが十分身体に気を配ってお過ごし下さい。まずはお見舞いまで。(9.9 武者昭七)

お知らせ拝受しました。この際それが最善と思います。長くお互に楽しめるよう、ゆっくり相談しましょう。従前通り元気にしている方が大勢います。みちさんも心配され過ぎませんように。不一(9.9 飯田孝三)

本当に驚きました。退院なされたようで、一先ずは安心しましたが、呉々もお大事になさって下さい。以前のみちさまのこともあり、どうも、夏は鬼門ですね。また、吟行句会が再開できるようになりましたら、声を掛けて下さい。

(9.11 Eメール半寿)

光成さんびっくりしました。大変だったですね。

冠動脈が詰まったということでしょうか？そうだとすれば、カテーテルを入れれば取敢えず大丈夫ということ

とでしょうか？まずは健康第一ですからお大事になさってください。

(9.11 Eメール 山下)

お便りありがとうございます。みちさんより緊急入院されたとお伺いしております。白金藪ではお一人で全てをなさり又対外的にも大役を果たしほんとうにお疲れのことと察しています。どうぞゆっくりと養生なさって下さいませ。かしこ(9.11 倉田紀子)

高志様 10月7日の吟行中止、了解しました。何よりも健康第一です。大事にならなくて良かったですね。

奥様ともどもくれぐれもご自愛ください。みちさんの一人吟行、残念ながら参加できません。(以前、行ったことがありますので)よろしくお伝えください。とりあえずお見舞いまで。(9.12 Eメール 興正拝)

日中のむし暑さも今夜は少し秋の気配を感じております。パラリンピックや大相撲やらゆっくり座って見ている訳にも行きませんが、人間の能力って凄いものですね。五体満足なのに我ながら虫ケラの如く感じます。生まれつき両腕のない生活考えられませんが、水泳選手であったり障害何のそのでアスリート驚くばかりです。十月は又法隆寺へいらっしゃいますとか、お土産句お待ちしております。会報同封しました。ごきげんよう。光成様みち様

(9.12 長屋璃子)

ご丁寧なお手紙有難うございました。本当にびっくり

いたしましたが、無事御退院できる様で安心致しました。昨日十時頃の紀子さんとおうかがい致しましたがお留守でしたので。気持ばかりを同封致しお送りしますので果物でも召し上がって戴ければ幸いです。御主人様はもとよりみちさんもうぞくれぐも御無理なさいません様にお願ひ申し上げます。おめにかゝれる日を樂しみに致しております。乱筆にて御見舞いまで。かしこ
みち様 (9.13 吉羽多美子)

冠省失礼致します。光成高志氏が急性心筋梗塞で治療とは唯々おどろきです。治療に専念して下さい。私も自身生きて帰った男、身にしみてお見舞い申し上げます。私は光成高志さんよりいたゞいた励ましのハガキは大切にとつてあります。深謝。御自愛のほどを。

切に。不一 (9.13 青木啓泰)

退院のご様子よかったです。来たる外来診察日迄万全でゆきましよう。近所の商店主、カミさんの友人の亭主など、術後徐々に馴らし、前より元氣なくらいに仕事にスポーツに励んでいます。春頃から変調に気づかれとのこと、記念出版のことや何かで随分疲れが溜ったせいだと思います。十月例会以後のことはご負担を軽くできるようにゆつくり考えましよう。何分にも異常陽氣、みちさん共々お体大切に。

(9.13 飯田孝三)

連絡遅くなつてすいません、お元氣そうで安心いたし

ました。吟行の件了解しました。お体に十分氣をつけて早くお元氣な高志さんにお会いするのを樂しみにしています。みちさんが行かれる日が決まりましたらお知らせください。

(9.15 Eメール 敦子)

受贈誌 (H 28年9月号)

要より火の手拳がれり大文字 (彩130号) 平野ひろし

満靈の去りて点々大文字 (〃)

万坪にソーラーパネル麦の秋 (〃)

佐藤恵子

虹色に梅雨満月の月の暈 (〃)

木村貞恵

草萌ゆる山積堆肥湯氣立てて (〃)

小泉博

冬瓜のごろごろとある産直店 (東京クラブ9月) 輝子

店先に秋海棠を染物屋 (〃)

理佳江

冬瓜を赤子のごとく抱へきし (〃)

文男

冬瓜や結城紬を守りし里 (〃)

万世遊

花たでや出自は去年のこぼれ種子

璃子

「よだかの星」(宮沢賢治)―修羅の彼方へ―武者昭七

「よだかは、実にみにくい鳥です」という「よだかの星」の語り出しは衝撃的である。語り手は次から次へとその醜さを言い立てる。顔はどこどころ味憎をつけたように斑で、くちばしはひらたくて耳まで裂けていること、足はまるでよぼよぼで一問とも歩けなこと。雲雀は

よだかに出会えば首をそむけ、ちいさい鳥でさえ鳥のつら汚しだと悪口をあびせるほどだ。醜さのためによだかは鳥仲間の異人としてみんなから拒絶されている。鷹などは「よだか」という名が不遜だとして改名まで迫ってくる始末だ。最後には「つかみ殺す」とさえ脅迫する。「いったい僕はなぜこうみんなに嫌がれるのだろう。今までなにも悪いことはしたことがないのに」というよだかの嘆きは僕らの胸をうつ。

よだかの受ける第二の衝撃は呑み込んだ一匹のカブトムシがのどをひつかいた時だ。よだかは鷹に殺されるはずの自分が実は毎晩無数の虫たちを呑み殺していたことに気づき大声で泣き出す。よだかは知らず知らずのうちに生きるために互いに命を奪い合う修羅の世界に身を置いていたのだ。その罪の重さ。「ああ、つらい、つらい。僕はもう虫を食べないで飢えて死のう。」よだかはそう決心する。文中でしばしば描写される鳥たちの見入る遠くの山火事の火はかれらの住まいが「火宅」であることのしるしである。「生きることとは好むと好まざると修羅の火宅に身を置くことだ」という発見はよだかをうちのめす。

よだかが選んだ最後の場所は遠くの空の向こうであった。しかし、よたかはそこでも拒否される。お日さまも星たちも笑って相手にしてくれない。力尽きて地面に

落ちかかったよだかは、しかし、にわかに狼煙のようにとびあがり鷹のように懸命に天上にのぼっていく。混濁した意識の中でよだかの心持は安らかであり横にまがつた血の付いた「くちばしはすこし笑っておりました」という語り手はいう。それはよだかの最後の飛翔が過酷であり悲痛ものでありながら満ち足りたものであることを物語っている。よだかはついに星になる。罪なくして周囲から拒否される不条理。生きるためにはほかの生き物を殺さねばならぬ悲劇。よだかの星の投げかける問は重い。

よだかはなぜ拒否されたのか。それはよだかがよだかであつたからに過ぎない。よだかがよだかであることがなぜ拒否される理由なのか。それはよだかがトリ共同体の異人だからだ。ほかの鳥たちとまったく異なる醜い姿をし、他の鳥たちの自尊心を傷つけたからだ。しかし、よだかがよだかであることはよだかのせいではない。よだかは無実なのだ。よたかという名前さえよだかというように勝手につけたものではない。「神さまから下さつた」のだ。よたかがよだかであることはかれの意思とかかわりのない決められたことであり、よだかはそれを背負って生きる以外に方法がない。しかしカレがカレであるために差別され、排除され抹殺されることはいまに始まつたことではない。人類は昔からそれを繰り返しているの

は僕らのよく知っていることだ。この業の深さ罪の重さに誰しも戦慄する。よだかが残酷な食物連鎖の輪を抜出すために選んだ道は飢えて死ぬことであった。自分の命のために他人の命を奪いながら生きる残酷と悲しみ。賢治はそれを「なめとこ山の熊」でも語って見せる。年とつた母親と二人暮らしの漁師の小十郎は貧しく山の熊を射止めてそれをゼニに代えて生きるしか道がない。その熊の毛皮さえ強欲な荒物屋のおやじに買いたたかれてしまう。小十郎は熊どもを殺してもけっして憎んではないなかった。それどころか谷を埋めて咲くひきぎくらの白い花をみながら語り合う熊の母子にしみじみとしてしまうほどにやさしいのだ。

しかし小十郎はある日、谷で巨大な熊に出会い逆襲されて死ぬ。崩れ折れる小十郎に向かって熊が言う。「おゝ小十郎おまえを殺すつもりはなかった」「おれはおまえが憎くて殺すんではない。ほかにみちがないからこんな因果な商売をしているんだ。おまえもおれも因果に生まれついたのは同じ。この次には熊なんか生まれくるなよ」というのが小十郎の口癖だった。それから三日目の晩。白い雪に囲まれた山の上の平らな場所にうずくまっている熊たちの姿があった。小十郎の霊を天上に送るためだ。真ん中に置かれているのは小十郎のなきがらで、その顔は冴え冴えとしてなにか笑っているようだった

という。よたかと同じ顔の表情であることに注意しよう。ともに修羅の世界を越えた安らぎであろう。賢治にとつて星こそが修羅を越えた美しい世界であった。(2016・4.19 受け)

芭蕉のかるみ以後の閑話休題 (3)

光成高志

元禄七年十月十の夜、夜伽に集まっている芭蕉の弟子たちと芭蕉の様子が翁反故文や去来抄にも残されている。「此夜、夜すがら伽して思ひよりし事ども物がたり居たりしに亥の刻ごろより、師夢のさめたる如く、粥をのぞみたまふ、人々嬉しさ限りなく次郎兵衛取計ひて疾く焚あげてすゝめまゐらす、中かき椀にて快くめされけり。朔日より已来の食事なり。土鍋に残りたるを去来椀にうつし入ておしいたゞき、

病中のあまりすゝるや冬ごもり

去来

去来曰、趣向を他にもとめず、有あふことを口ずさみて師を慰めまゐらせん、深く案じいらすと頓に句作りたまへ。維然は前夜正秀と二人にて一ツの蒲団をひつぱりて被りしに、かなたへひきこなたへひきて、終夜寝いらざりければ、はてはしらくと夜明けけるにぞ、其事を互に笑ひあひて、

ひつぱりて蒲団に寒き笑ひ哉
おもひよる夜伽もしたし冬籠

維然
正秀

一座是をきゝていづれもどつと笑ひければ、師も笑ひたまへり。人々嬉しさかぎりなく、十日已來の興にぞありける。・・・

支考は師の發句を滅後に一集せんと心願あれど、此ごろの病苦に悩みたまふに見合わせぬたりしが、今日機嫌よきに乘じて申出侍らんと去來に申たりければ、去來はかねて師の心中を知りたりし故大に怒り、小ざかしき事を申さるゝもの哉。師は平生名聞らしきことを好み給はず、今日漸く快き軀を見請はべりて諸人嬉しと思ふ中に御氣に逆ふことを聞せ申ては、御心を勞せしめ申立事奇怪なり、此後病床近く寄り給ふな、早く其座を立たまへと、聲あらゝかに次の間に迫立けり。支考もはからずもの言出して諸子の聞前、面目をうしなひしが、行々維然に内向ひ、我に句あり、そこ書給へといひて、

しかられて次の間にたつ寒さかな
支考

師もほの聞給ておかしがり給ひけり。
くじとりて菜飯焚かする夜伽かな

皆子なり蓑虫寒く鳴きつくす
木節

うづくまる藥の下の寒さかな
乙州

一々維然吟聲しければ、師丈草が句今一度とのぞみ給ひて、丈草出来されたり、いつ聞きてもさびしをり調ひたり、面白しくと、しわがれ聲もて譽め給ひけり。」

現代の文献（堀切実著芭蕉の門人一九九一）では、「師

の病状を案じながら菓草を煎じている鍋の傍らで、身がかがめてうずくまつている己の姿をもうひとりの自分が眺めやつているような句である。師を想うやるせない気持ちにがにじみ出ている。これは単なる真情吐露の發想による吟ではない。「景」の中に「情」をこめたような表現に、他の追隨を許さぬほどの孤絶の心象が浮かび上つてくるのであった」との評がなされている。溯つて去來抄では、「かゝる時はかゝる情こそ動き侍るらめ、興を發し景を探るに豈違あらんや、と此時にて思ひ知りはべる」と書いている。このような異常時にあつてはこのような心情が動くのでしょうか、感興を起こし景色を探るのにどうしてぐずぐずしておれましようやというのである。

この句に至るまでの芭蕉の枕辺の様子が明るく書かれてあるのは実に近代的是ではないか。それに私は感動する。一枚の蒲団を引つ張りあつて夜が明けてしまふそのことを二人で笑い合つてそのまゝの句をつくる。一座がこれを聞いてどつと笑う。芭蕉も腹が痛いのに笑う、皆嬉しさ限りないとある。支考は芭蕉が死んだ後の句集を出そうと腹積もりがあつて、その日は機嫌のよい師にそのことを申し出ようとして、先輩弟子の去來にこつぴどくしかれ、師に近く寄るな、早く座を立てと声を荒くして次の間に迫立てられる。面目を皆の前で失つたが、句

が出来た、書いてくれと維然に言って書かす。句も芭蕉がほのかに聞いておかしがった。三人の句を維然が一々声を出して読み上げた。芭蕉は丈草の句をもう一度聞かせてくれと言って、二度目を聞かれて「丈草でかしたり、いつ聞いてもさび、しをり調いたり、面白い面白い」としわがれ声で褒められたというのである。今回病室で読んだ所為もあるのか、

「うづくまる薬の下の寒さかな（丈草）」の句に一番胸を熱くした。自然に昔のことを思い起こした。そこに行くつもりでなく、膳所の駅から人々の行くままについていくと、丈艸佛幻庵址という石柱が立っていた。直ぐ脇は国道一号線が走っていて交通騒音が激しい。経塚もあった。経の一字を石に書いて埋めて三尺の経塚を成したとある。これは芭蕉追悼のためであったと知って驚愕したのを覚えている。芭蕉の弟子は三百人とも二千人とも言われるそうであるが、芭蕉十哲の基角・嵐雪・杉風・去来・丈草・凡兆・許六・支考・野波・維然は皆その俳風に置いて各々独立した俳諧師として自己流に蕉風を進めたのである。丈草程俗を離れて芭蕉を慕いその魂を受け継いだと言われる弟子はいない。これは教育の原点である。そして自分の句境を作り上げていったのだ。「連のあるところへ掃くぞきりぐす」の句などは後の小林一茶へ継がれたのだと思う。

(H 28. 9 15)

我孫子日記

	8/19
* 懇談会	8/21
*2 トライアスロン応援	8/24
*3 目黒、駒場	9/2
*4 入院・治療	9/10
	退院
*5 みち駒場	9/15
	9/16
	休会・発行

* 極楽鳥花活けある雅宴誓子軸

*2 水鳥の飛び立つが如トライアスロンスタート

バイク行く土手の向こうに蓮緑

トライアスロン見てゐて何か引き込まれん

*3 大きな字の座禪部立ちて夕立来る

雨やまぬ庭ににいにいつくつくし

仰臥漫録糸瓜の色のみどりかな

エトナ山雲の懸れり手帳の絵（茂吉の手帳）

*4 ただ見る病室の窓秋の雲

八海山麓の棚田秋薊

秋薊三好達治の詩碑と海

いぼむしり北は嫌ひ南に移る



原生林あつて一画竹の春

*5 シスターの下り来る坂の白木槿

秋風や松岡國男の野辺の詩^{うた}

上田敏の文字あきらかに秋の昼

旧姓は鳳^{しらとり} 晶子百合の花

牧水の燕啼く歌昼灯

佛の字伸ばせば掠れ子規忌かな

胸薄き夢二の女^{ひと}や秋桜

犀星の子は朝子と云ふて草の花

みち

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

編集後記

今月も旬会を休まざるを得ず、このような会報になりました。誠に相すみません。皆様から御見舞いの便りをたくさんいただき、ご心配をお掛けしました。何せ思わぬところが詰まっていると言われ、緊急処置をされ一週間で退院、一か月置いて残りを治療することになりました。今は、医者の言われるままに生活しております。今回私の罹った病気の医学的な中身は21日(水)NHKで放映されるらしい。駒場吟行も法隆寺行も延期しました。10月21日の例会には出られると思っております。どうか今迄通りよろしくお願い致します。左に私の編集机から見えた秋の気配の写真を貼り付けました。

白金霞9月号(第67号)平成28年9月発行
編集・発行人 光成高志(〇四―七―一八七―一〇六八)
発行所 270・1119 我孫子市南新木2・14・17
表紙の題字…加納綾女。写真…9月16日の白金霞